

第 97 回 「世界難民移住移動者の日」 委員長メッセージ

誰も存在しない人にしてはいけない、「一つの人類家族」だから  
さしだされる手 にぎりかえす手 だれとでも

今年も「世界難民移住移動者の日」を迎えます。教皇ベネディクト 16 世は、今年のメッセージのタイトルを「一つの人類家族」としました。世界には異なる文化、さまざまな宗教を持つ人々がいますが、すべての人が、神という人間としての同じ起源と唯一の終局目的を持つ家族として共生していく道を歩むよう呼びかけています。

私たちはこの日を毎年の記念日として思い出しますが、暴力と迫害から逃れてきた難民や強制移民となった人々にとっては、今日をどのように生き延びるかという毎日であることを忘れてはならないでしょう。

2009 年の統計(※1)では、世界でおよそ 4,330 万人の人が強制移動を余儀なくされ、また自主的に帰還した難民は、ここ 20 年で最も低い水準にとどまっています。傾向としては、難民の数はほぼ横ばいですが、国内難民はここ数年、飛躍的に多くなってきています。無国籍者は 60 か国で 660 万人、しかし推計では 1,200 万人いるとされています。実は日本でもその数は大変多く、出生届けがどこにも提出されず、法的に「存在しない」子どもたちは、約 2 万人もいます。それでは、実際には日本にどのくらいの無国籍の人たちがいるのでしょうか。もし日本政府が本当に無国籍者を減らそうと思うなら、法的な配慮をするだけで解決するケースは多くあります。にもかかわらず、こうした人々が同じ状態に置かれ続けているのは、政府の不作为だけでなく、私たちの無関心にも起因しています。教皇のメッセージにあるように、まず私たちの身近に住んでいる難民認定されない絶望的な状況に置かれている人たち、無国籍の状態にいる人たちが私たちの大切な「家族」であることに思いを馳せ、関心を持つことです。その上で何ができるのかを具体的に考えなければ、「世界難民移住移動者の日」は単なる毎年の記念日として通り過ぎるだけです。

来年7月に「改定入管法」(※2)が実施されます。一つの例ですが、これまでは、たとえビザが切れ、超過滞在の状態になった外国人も、役所で外国人登録をし、行政サポートを受ける対象でしたが、これからは法務省入国管理局による集中管理になることから、それができなくなり、彼らは「存在しない人」となっています。人権を認めないどころか、「存在しない人」を増やしていく法律となっています。改定入管法については、解説の冊子がありますので手に取り、私たちの国は何を実施しようとしているかをしっかり学んで下さい。

日本で生活している難民・移住者・移動者たちを、「存在しない人」ではなく、私たちの大切な家族として意識の中に、そしてこの社会の中にしっかり位置づける努力をしていきましょう。さしだされた手をにぎりかえし、誰もが「一つの人類家族」としてつながる社会を目指していきましょう。

(※1)2009 年統計の出典

国際連合難民高等弁務官事務所(UNHCR)のホームページを参考としました。  
「数字で見る難民情勢(2009 年)」は、「Global Trends2009」の統計に

基づいています。

[http://www.unhcr.or.jp/ref\\_unhcr/statistics/index.html](http://www.unhcr.or.jp/ref_unhcr/statistics/index.html)

(※2)改定入管法

「入管法」とは、「出入国管理及び難民認定法」です。2009年7月、日本政府は、外国人登録法を廃止し、新たな在留管理制度と外国籍住民の台帳制度に再編する入管法・入管特例法・住民基本台帳法の改定法が成立しました。

2011年9月25日

日本カトリック難民移住移動者委員会  
委員長 松浦 悟郎

9月11日祈りの意向依頼 池長会長

CBCJL11-44

2011年8月23日

司教各位

日本カトリック司教協議会  
会長 池長 潤

東日本大震災から半年にあたり、日本の教会として被災地への祈りをささげるお願い

十 主の平和

朝夕の風に秋の訪れを感じるこの頃となりました。

司教様には、お元気でご活躍のことと存じます。

さて、3月11日に発生した東日本大震災から9月11日で半年を迎えます。各教区の司教様をはじめとして、日本全国の教会から被災教区へ向けての祈りと物心ともにささげられる援助は、現在も継続して行われていることと思います。この未曾有の震災に対して、私たちは一丸となって今後も祈りと援助を継続していきたいと希求しております。

被災地では徐々に復興が進んでいる状況ですが、地震や津波で親族を亡くされた方々の心の傷は、長い時間をかけても癒えることは難しく、原発で居住地域を追われた方や、原発地域の近隣に住む人々は、今でも不安な毎日を送っていることでしょう。私たちも被災した方々や今なお不安に苦しむ方々に心を合わせ、祈りのうちに過ごして参りたいと思っております。

このたび、東日本大震災発生から半年を迎える9月11日が日曜日にあたるので、この日のミサで特に、東日本大震災で亡くなられた方々、被災された方々、未解決の原発で今なお不安とたたかっている方々のために、日本の教会としてともに祈りをささげることを、教区内の皆様にお伝えいただけますと幸甚です。

なお、当日の共同祈願の例文を添付いたしましたので、ご活用ください。

また、もうすでにエキュメニズム部門の野村責任司教様より、各教区にお知らせがありましたが、日本キリスト教協議会とカトリック中央協議会の共催で、9月11日に東京の日本基督教団下谷教会において、「3.11 東日本大震災を心にとめ、死者への追悼・被災者への慰め・被災地の再生を求める礼拝」が開催さ

れます。各教区でエキュメニカルな活動を行っている小教区、団体がございましたら、この礼拝についてご紹介いただければ幸いです。超教派で同時刻に、同じ意向で祈りをささげる集いを行うこともお勧めいたします。

被災地の一日も早い復興を願い、被災者の皆様の希望ある未来に向けて、日本の教会の一人ひとりが心を合わせて寄り添うことができますように。

祈りとともに

#### 同封資料

2011年9月11日（日）の共同祈願（例文）

1部

#### 2011年9月11日（年間第24主日）のミサの共同祈願（例文）

すべての人の重荷を担ってくださる神に信頼して祈りましょう。

一同 神よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

東日本大震災から六か月を迎えて祈ります。震災で亡くなったすべての人を、あなたの安息にあずからせてください。また、今なお不安と困難のうちに避難生活を送る多くの人に、力強いみ手を差し伸べてください。心も体も疲れ果てた人々に、再び立ち上がる力が与えられますように。

あなたがよいものとしてお造りになった自然が放射能によって汚染されてしまいました。行政や専門家をはじめ多くの人の協力によって、一日も早く美しい自然を取り戻し、汚染された地域の人々が以前の生活に戻ることができますように。

すべての人を聖霊の光で照らしてください。支援が十分に行き渡っていない地域に暮らす多くの人がいることを心にとめ、惜しみない協力を通して、ともに生きるきずなと一致を深めることができますように。

震災と原子力発電所の事故によって、生まれ育った地域を離れて暮らさなければならない人々がいることに気づかせてください。わたしたちが祈りとさまざまな支援を通して支えとなり、新たな一歩を踏み出すための力となることができますように。

「新しい創造」を基本方針に掲げ、復興に向かって歩みはじめた仙台教区のために祈ります。地域と一体になった支援活動を通して一人ひとりが強いきずなで結ばれ、キリストにおける希望と一致をあかすことができますように。

いつくしみ深い神よ、あなたに信頼して祈るすべての人を顧みてください。救いのことばに慰めを見いだし、新たな希望に満たされますように。

わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

## 2011年「世界宣教の日」教皇メッセージ

(2011年10月23日)

「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」(ヨハネ 20・21)

キリスト紀元の新たな千年期が始まろうとする2000年の大聖年に、尊敬すべき教皇ヨハネ・パウロ二世は、「初期のキリスト者の特徴であった熱情」(教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに』58)にわたしたち一人ひとりがあずかり、福音をすべての人に告げ知らせる決意を新たにすることを力強く再確認しました。

福音をのべ伝えることは、人類に、どのように生を全うするかを真剣に追い求めるすべての人に、教会が提供できるもっとも尊い奉仕です。毎年、「世界宣教の日」を祝うたびに、その奉仕への招きが繰り返されます。福音をたえず告げ知らせることにより、教会も活気づき、同時に、教会の熱意や使徒的精神も活性化するのは、また、福音宣教は司牧の方法を刷新し、新しい状況—新たな福音化が必要とされるような状況—に司牧の方法をよりよく適応させ、宣教への熱意によって活力を得させるのです。「宣教活動は教会を刷新し、キリスト者の信仰と自覚とを活性化し、新鮮な意気込みと新しい刺激を与えるからです。信仰は、他者に伝えられるときに強められます。教会のこの普遍的使命に献身することにおいてこそ、キリスト者の新たな福音化は励ましと支えを見いだすのです」(教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『救い主の使命』2)。

### 行って告げ知らせなさい

「行って告げ知らせなさい」。このことは、典礼祭儀においてたえず繰り返されています。とりわけ感謝の祭儀の締めくくりには、復活したイエスが弟子たちに与えた「行きなさい……」(マタイ 28・19 参照) という命令がつねに響き渡ります。典礼はいつでも、神のこぼの救いの力、キリストの過越の神秘の救いの力といった、わたしたちが経験してきたことがらをあかしするための「世界からの」呼びかけであり、「世界における」新たな宣教への招きなのです。

復活した主に会った人は皆、エマオの二人の弟子のように、そのできごとを他者に告げ知らせる必要を感じます。パンを裂いてくださったときに主だと分かった後、彼らは時を移さず出発して、エルサレムに戻りました。そして、十一人の弟子が集まっているのを見て、自分たちに道中で起こったことを知らせたのです(ルカ 24・33-35 参照)。

教皇ヨハネ・パウロ二世は、いつも目覚めていて、主のみ顔を認め、「主を見た」という喜びの知らせを皆に伝えるために駆け出す用意をするよう、信者を促しました(教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに』59 参照)。

### すべての人に

福音の宣教はすべての人に向けられています。教会は「その本性上、宣教することを使命とする。なぜなら教会は、父なる神の計画による子の派遣と聖霊の派遣とにその起源をもっているからである」(第二バチカン公会議『教会の宣教活動に関する教令』2)。

「福音を伝えることは、実に教会自身の本性に深く根ざしたもっとも特有の恵みであり、召命です。教会はまさに福音をのべ伝えるために存在しています」(教皇パウロ六世使徒的勸告『福音宣教』14)。したがって、教会は決して自らの中に閉じこもることはできません。教会が特定の場所に根をおろすのは、さらに遠くへ行くためです。キリストのこぼのに従い、聖霊の恵みと愛に動かされた教会の活動は、キリストへの信仰に人々を導くために、すべての人とすべての国民の前に全き姿をもって現存するものとなるのです(第二バチカン公会議『教会の宣教活動に関する教令』5 参照)。

この責務はいまだその緊急性を失っていません。実に「教会にゆだねられている救い主の使命は、その成就からはほど遠い状態にあります。……人類全体を見わたすと、この使命はまだ始まったばかりであり、わたしたちはこの使命を果たすために、全力でかかわらなければならないことが分かります」(教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『救い主の使命』1)。2000年が経過しても、キリストを知らず、その救いの知らせを一度も聞いたことがない人々がいることを思い、平然としていることはできません。

そればかりでなく、福音を告げ知らされたにもかかわらず、それを忘れたり放棄したりして、もはや教会に属していることを認めない人が増えています。また、現代における多くの状況において、伝統的なキリスト教社会の中ですら、人々は信仰のことばに自分自身を開こうとしません。グローバリゼーション、さまざまな思想、相対主義の蔓延によって、文化には変化が起きています。その変化によって、あたかも神は存在しないかのように、福音のメッセージを無視し、道徳的価値を損なっても、よい暮らし、高収入、出世、成功を人生の目的として追求するよう促す考え方やライフスタイルが生じているのです。

## すべての人の共同責任

宣教は普遍的なもので、あらゆる人、あらゆる物、あらゆる時に及びます。福音は受けた人だけのものではなく、分かち合うべきたまものであり、伝えるべきよい知らせです。このたまものへの献身は、限られた人だけでなく、むしろ「選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民」(一ペトロ2・9)であるすべての信者に、主の偉大な行いを宣言するよう託されています。

すべての活動は福音宣教と関連しています。世界における教会の福音化活動に注意を払い、協力することは、一時的な、あるいは特別な機会だけに限られるものでもなく、数多くの司牧活動の中の一つと考えられるものでもありません。宣教は教会にとって本質的な要素であり、つねに心に留めなければならないことです。

洗礼を受けた一人ひとりと教会共同体全体は、散発的、一時的ではなく、信者としての生活の一環として、たえず宣教にかかわることが重要です。「世界宣教の日」は、一年に一度、その時だけではなく、宣教という召命にどのようにこたえるかについて立ち止まって考え、思いめぐらすための貴重な機会です。宣教という召命は、教会生活にとって不可欠な応答なのです。

## 世界の福音化

福音化は複雑なプロセスであり、さまざまな要素を伴います。その中でも宣教の活性化においては、連帯に特別な注意が払われてきました。連帯も「世界宣教の日」の目的の一つです。この日には、教皇庁宣教援助事業を通して、宣教地で福音化のための責務を果たしていくための支援が求められます。それは、教会を築き、強固なものとするのに必要な諸機関を、カテキスタ、神学校、司祭を通して支援することであり、また貧困、栄養不良、とりわけ児童の栄養不良、疾病、医療や教育の欠如という深刻な事態に陥っている国の人々の生活水準を改善するために、わたしたち一人ひとりが自分にできる貢献をすることです。

こうしたこともまた教会の使命です。福音をのべ伝えるとき、教会は人間の生活を余すところなく温かく受け入れます。神のしもべ教皇パウロ六世は次のように再確認しました。福音化において、人類の進歩、正義、あらゆる種類の抑圧からの解放にかかわる分野を無視することは許されるべきではありません。また、政治の領域の自律は、言うまでもなく尊重されるべきです。

人間の現実的な問題に対する配慮がなければ、「苦しみ困っている隣人に対してもつべき愛に関する福音の教説が無視され」(教皇パウロ六世使徒的勸告『福音宣教』31、34)ます。それは、「町や村を残らず回って、会堂で教え、み国の福音をのべ伝え、ありとあらゆる病気やわずらいをいやされた」(マタイ9・35)イエスの行いと一致しません。

したがって、キリスト者は、教会の使命に共同責任をもって参加することを通して、キリストから与えられた交わりと平和と連帯のつくり手となり、すべての人に向けられた神の救いの計画を実践するためにも働くのです。この計画が直面する課題は、すべてのキリスト者がともに歩むことを要求しています。宣教

は皆とともに歩むこの旅路に欠かすことができません。その道のりにおいて、わたしたちはそれを土の器に納めながらも、福音のはかりしれない宝であるキリスト者としての召命を生きます。死んで復活し、わたしたちが教会で出会い、信じているイエスの生きたあかし人となるのです。

「世界宣教の日」が、すべての人にキリストをもたらしするために人に会いに「行く」という願いと喜びを、各人のうちに目覚めさせますように。キリストの名において、わたしは使徒的祝福を皆様、とりわけ福音のために尽力し、苦勞されている方々に送ります。

2011年1月6日 主の公現の祭日  
バチカンにて  
教皇ベネディクト十六世

(教皇庁宣教授助事業・日本事務担当訳)